

随筆

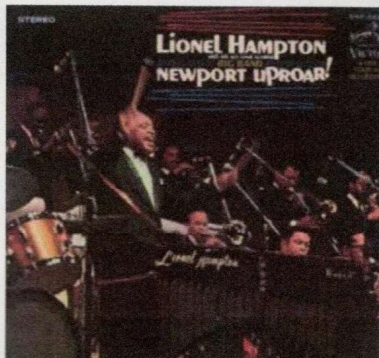
ヴィブラフォンとジャズ

飯田良樹 (久居一志地区)

これまで医療や歴史に関わる拙文を度々掲載させて頂いたが、今回は私の趣味であるジャズについてのお話です。

ジャズといっても範囲が広く、演奏楽器も多々ありますが、その中でも少し毛色の変った楽器「ヴィブラフォン」と私の思い出を。

ヴィブラフォンは、金属板を叩いて出た音を電気で羽を回転して下の金属筒をヴィブラ（共鳴）させて音を出す楽器で、木琴に羽と金属筒がついたと思えば良いが、羽と金属筒により音色がいろいろと変化します。



「ニューポート'67のライオネル・ハンプトン」
VICTOR COMPANY OF JAPAN LTD 1968年

最初にジャズに用いたのは、ライオネル・ハンプトンで1930年にルイ・アームストロングのレコーディングに参加したとき。スタジオに置いてあったヴィブラフォンを弾いてみるようにアームストロングから言われたのがきっかけといわれている。1936年、ハンプトンはヴィブラフォン奏者としてベニー・グッドマンのバンドに参加する。これはジャズ楽器としてのヴィブラフォンの存在を広く知らしめただけでなく、人種の壁が厚かった時代に白人の人気バンドに黒人のミュージシャンが参加したという点でも画期的な出来事であった。ドラム奏者としても卓越して「ハンプトンズギ」が入るライブレコード『ライヴ・アット・ニューポート'67』が楽しい。



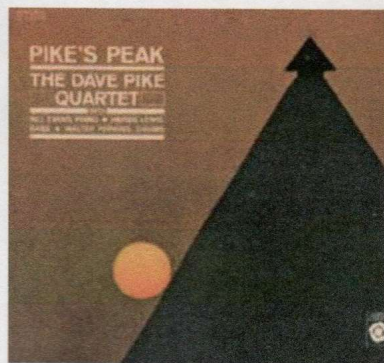
「これがMJQ」日本ビクター 1969年頃

次に名前をあげるのは、ミルト・ジャクソン。1951年にミルト・ジャクソン・カルテットをジョン・ルイス（ピアノ）、パーシー・ヒース（ベース）、ケニー・クラーク（ドラム）と結成。翌年にモダン・ジャズ・カルテット（MJQ）とグループ名を変える。管楽器は使わず、ミルト・ジャクソンのヴィブラフォンを中心にクールで室内音楽的なジャズで人気を博した。オリジナルの楽曲には、ジョン・ルイスによる「Django」（ベルギーのジャズ・ギタリスト、ジャンゴ・ラインハルトに捧げられた）と、ミルト・ジャクソンによる「Bags' Groove」（Bagsはミルト・ジャクソンのニックネーム）がある。



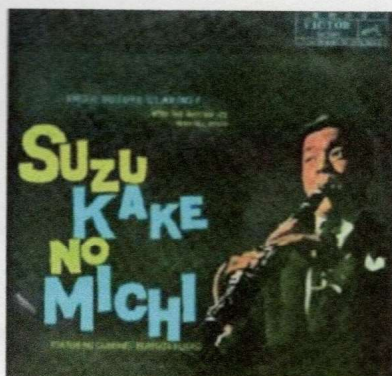
1979年にニューヨークの脳神経外科シンポジウム出席と旧英領バージニア植民地地域を再現したコロニアル・ウィリアムズバーグで脳脊髄液拍動

波のポスター発表の為に渡米したとき、丁度カーネギーホールでミルト・ジャクソンの40周年記念演奏会をしており行った。当日券だったので最上階しか空いておらず、彼は豆粒ほどであったが演奏は素晴らしかった。入場券は当時1ドル240円で7ドルであった。



「PIKE'S PEAK」EPIC 1962年

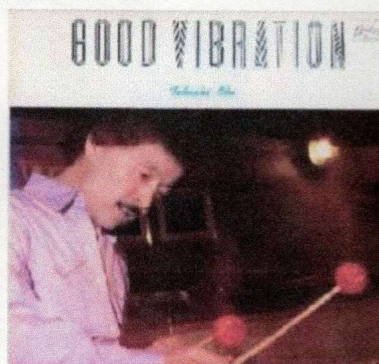
マニアックになるが、私の好きな演奏者はデイヴ・パイク。1938年3月23日デトロイト生まれで、8歳の時にドラムに触れ、ドラマーとして活動を始め、西海岸でロックやメキシカン・バンドの仕事をしていた。ジャズの最初の仕事は、ピアノのポール・ブレイとの共演で、以後、ビル・エヴァンス、オーネット・コールマン、エルヴィン・ジョーンズ、パディ・デフランコ等との共演を重ね、60年～65年にかけて、ハービー・マンのグループに在籍し有名になる。63年の「ダウンビート」誌の評論家投票でヴィブラフォン・ニュースター第一位に選ばれる。その後、活動の拠点をヨーロッパに移し、フォルカー・クリーゲルらと組んでデイヴ・パイク・セットを結成。私はお気に入りのビル・エヴァンスとの共演レコード『パイクス ピーク』に入っている「ベサメ・ムーチョ」をお薦めしたい。



「鈴懸の径」

VICTOR COMPANY OF JAPAN LTD 1957年

日本に目を移すと、ヴィブラフォンの松崎竜生、ピアノの秋満義孝、クラリネットの鈴木章治らによる「鈴木章治とリズム・エース」が結成された。立教大学のキャンパス内の鈴掛（こでまり）を題材に灰田克彦（立教大出）が歌った「鈴懸の径」を1957年1月、スウィングの王様といわれるベニー・グッドマン楽団が来日したときに、クラリネットのピーナツ・ハッコーと「鈴木章治とリズム・エース」がレコーディングして大ヒットさせた。



「GOOD VIBRATIONN」テイチク 1982年

平岡清二、松本 浩など日本には沢山ヴィブラフォン奏者はいるが、私の思い出は大井貴司である。彼は9歳からマリンバを始めたと言われているが、津高で私の1学年下の卓球部であった。練習する体育館が同じで、私達のバスケットコートによく玉を転がしてくるので、踏んづけて怒られた。卓球は上手でインターハイに出場していたので、まさか有名なヴィブラフォン奏者になるとは思ってもみなかった。高校卒業後、国立音楽大学打楽器科入学を機にヴィブラフォンを志したとの事。1980年アメリカ建国100周年記念ビッグイベントとして開かれたウォルフトゥラップ・インターナショナル・ジャズフェスティバルにMJQのピアニスト、ジョン・ルイスに呼ばれ、ゲスト出演して世界のトップ・ミュージシャン達と共演。ヴィブラフォン奏者としての地位を築いた。津の祭りや三重でのイベントがあると「大井貴司&Super Vibration」を率いて演奏をしている。

現在、若手のヴィブラフォン奏者が沢山育っており、三重県文化会館、四日市市民会館や三重県下のライブハウスなどで演奏会が開かれている。興味がある方は一度会場に行かれてヴィブラフォンの音色の素晴らしさ、心地良さを堪能して欲しい。